



カトリック新潟教区
編集発行人 教区報編集部
〒951-8106
新潟市東大畑通1-656
TEL. 025-222-7457
FAX. 025-222-7467

教区宣教司牧評議会

規約を承認

十一月二十三日に新潟カトリックセンターで開催された教区宣教司牧評議会の設立委員会で審議した規約は、同日菊地司教によって承認されたので、同評議会規約の全文を掲載する。なお、同規約、第四条(五)の「カトリック新潟教区・女子奉献生活者の会(仮称)」については、名称が確定し次第、差し替えを行うことを含めて承認された。

第一回目の宣教司牧評議会は、来年度の四月三十日に新構成メンバーによって開催が予定されていて、この評議会の目的である教区全体の宣教司牧を推進する

カトリック新潟教区宣教司牧評議会規約

第一条(名称)

本会は、カトリック新潟教区宣教司牧評議会と称する。

第二条(事務局)

本会は、カトリック新潟教区事務所内に事務局を置く。

第三条(目的)

本会は新潟教区の信徒、修道者、司祭の一致、協力、交流をはかり、新潟県、山形県、秋田県からなる教区全体の宣教司牧を推進するための重要事項を司教の諮問を受けて検討することを目的とする。

第四条(構成及び任期)

本会は、次のメンバーによって構成される。

- (一) 司教総代理
 - (二) 教区本部事務局長
 - (三) 各地区の地区長(司祭)
 - (四) 各地区を代表する信徒2名
 - (五) 「カトリック新潟教区・女子奉献生活者の会(仮称)」の代表者2名
 - (六) 司教が必要に応じて任命する者
2. 上記メンバーのうち(一)、(二)、(三)についてはその任にある期間を任期とする。(四)、(五)については2年間とし、6年を上限として再任を妨げない。任期途中で交代せざるを得ない場合、交代した者の任期は前任者の残任期間とする。(六)については、司教が必要に応じて任期を定める。

第五条(活動)

本会は、次の活動を行なう。

- (一) 教区の宣教司牧に関する事項について司教の諮問に答える。
- (二) 教区の宣教司牧に関する提言を司教に提出する。
- (三) 教区内の宣教司牧に関する諸問題・諸課題の情報交換の場となる。
- (四) 教区内の宣教司牧に関して協力体制を整える。
- (五) 小教区、地区、委員会等の活動の支援、励ましを与える。

第六条(会議の開催)

本会は年一回開催する。ただし、司教は、必要に応じて臨時に会議を招集することが出来る。

第七条(会議の議長)

本会の会議の議事進行を司る議長は、司教が任命した者が務める。

第八条(会議の成立と決定)

本会の会議は、全評議員の過半数(委任状、代理人も含む)をもって成立する。

2. 本会の会議の決議は、司教の承認を得て、実行される。

第九条(経費)

本会の運営費は、教区の負担とする。

第十条(規約改正)

本規約の改正には、本会会議での議決の上、司教の承認を必要とする。

付則

1. 本規約は、二〇〇七年四月一日より実施される。

教区司祭評議会から

十一月二十七、二十八日の正午まで司教館で五地区の地区長と選出された司祭、更に司教の顧問、総代理、事務局長など十五人が出席して年二回開催される秋の司祭評議会総会が開かれて活発な意見が交わされた。主な内容は次のとおり。

(一) 一八八殉教者の列福に向けての教区内の取組み(司教談話) 列福が決定したら教区としても、米沢の殉教者のお祝いをしたい。現在米沢教会を中心に列福に向けて準備委員会を組織して準備している。

米沢でのお祝いは列福式後の適当な時期に行う。

来年二月四日から一週間行われる「殉教者を想い、ともに祈る週間」に併せて、その週間からお祝いのための特別献金を行う。

(二) 提言と意見交換

(教区青少年担当司祭)

高橋学師より各地区を回って司祭たちからの意見をもとに、教区の今後の青少年司牧への提言があった。(主な内容)

- 青少年司牧は各地区で独自に行われているが地区ごとの連携が乏しいのが現状。各地区の担当者が一つなる必要を痛感。
- 教区主催の中学生錬成会の呼びかけでも、若者たちをどうしていきたいかというものを持っていることが大事。
- 司祭が呼びかけるだけでなく、同世代からの横のつながりを

大事にし、意欲を持った青少年を育てるために、小教区での普段からの呼びかけが大事。各地区にこの担当者を任命して教区青少年委員会を作り連携して推進することにした。

(司教意見)

(三) 来年度の主な予定

- 来年度の司教公式訪問は秋田山形地区を訪問の予定
- 長岡地区聖体奉仕者養成講座(柏崎で二月十八日、二十五日)
- 山形こまぐさ保育園の落成(三月三日見込み)
- 第一回宣教司牧評議会(四月三〇日)
- 山形地区大会(鶴岡で五月二〇日)
- 長岡地区大会(柏崎で六月十日)
- 司祭の集い(六月十一日から十三日)
- 長岡地区サマースクール(八月六日から八日)
- 土崎教会創立五〇周年記念(九月十七日)
- 神言会来日百年記念講演会(秋田で十月二十七日)
- 新潟教会献堂八〇周年記念(十一月三日)

ノルベルト・ナハク神父

(前大館・鹿角教会主任、元秋田教会助任)は十二月十一日朝、脳内出血のため吉祥寺教会の自室で意識を失い、武蔵野市の病院で帰天。43歳。インドネシア出身で二〇〇五年四月まで秋田地区の宣教司牧に活躍された。



アジア宣教大会に

新潟教区から信徒参加

十月十八日から二十二日までタイ北部の都市チェンマイで初めて開かれた「第一回アジア宣教大会」に、全世界から約一千人が参加し、日本から十三人の信徒が出席して、新潟教区から福島祥紘(まさひろ)さん(新潟市寺尾教会)が参加した。

教皇庁福音宣教省の呼びかけでアジア司教協議会連盟(FABC)が準備した大会は、「アジアにおけるイエスの物語」についての分かち合い、つまり宣教とは、自分の生き方、自分の体験をとおしてイエスの物語を伝えることだというテーマに沿って、それぞれが自分の持っている独自のイエスとの信仰における出会いの物語を語り合った。

参加者の福島さんから、大会を通して見えた宣教についての教会や信徒の課題を語ってもらった。

アジア宣教大会に出席して

福島 祥 紘

第一回アジア宣教大会がタイの北部の都市チェンマイで二〇〇六年十月十八日(水)から二十二日(日)まで五日間にわたって開かれました。日本からは菊地功新潟司教を団長として、計二十一名の方が参加されました(司教三名、司祭・シスター五名、信徒十三名―仙台教区2、新潟1、さいたま1、東京2、福岡1、長崎2、沖縄2、フィリピンの方三名を含む)。菊地司教様の「司教の日記」やカトリック新聞(06/10/29、11/05号と二回)にかなり詳しく掲載されていますので、ここでは新潟教区から出席した一信徒の

目を通した宣教大会の実像を書いてみたいと思います。

宣教大会は各大陸ごとに開かれていて、アジアだけが未だ開催されていないために、バチカンとしてはある種の危機感を持って、今回の開催に踏み切ったそうです。そのため、バチカンからは大会のために多額の補助金が出され、本部のあるインドや大会地のタイではかなり前から準備を進めていただろうということは、実際に大会に出席してみると実感できたことでした。素晴らしく組織化された大会だったのです。日本では、実

は大会の始まる一ヶ月くらい前までは、何がどうなるかわからないために、準備のしようがなかったのが現実でした。従って、準備会はフライトにのる前

の日(十七日)に成田空港のホテルで初めて全員そろって大会に臨む心構えを聞くことになったのです。はつきり言って、準備不足はあったと思います。これは、韓国や台湾も同じで、大陸中国が不参加と北東アジアの声が届きにくい構成になっていたのではないかと思います。

タイは初めてでしたが、特にチェンマイの町は静かで文化的な感じのよいところでした。近代的なバンコク空港でのりかえチェンマイに着いたのは十八日の夜の八時過ぎ。しかし、タイの夜の八時過ぎ。しかし、タイのスタッフの女性達が白い花のお手製首飾りを持って出迎え、全員の頷にかけて歓迎してくれた時から、タイ式ホスピタリティは最後の日まで続いたのでした。これは感謝のしようがありません。一ヶ月前のクーデターの際、空港や町中、寺院など主要な処に三メートル四方の大きな国王夫妻の写真が飾られているのがそうなのでしょうか。他には何も感じさせるものはありませんでした。大会会

場のロータスホテルは十三階建ての大ホテル。参加人員はほぼ一〇〇〇人が泊まってもなお余るほど。事前の情報では一部屋四〇五人ということでしたが、実際はゆとりのあるツインベッドの二人部屋。これは助かりました。遅い夕食を皆で摂ってから、次の日に備えて早く寝ることとなりました。

十九日から二十二日までの四日間は、「司教の日記」の記載のように最後の日を除いて、朝六時から夜十時までぎっしりと会議の連続で、ホテル外に出るゆとりは殆どありませんでした。このうち、三日間にわたって行われた「アジアにおけるイエスの物語」についての分かち合いの話しを述べることにいたします。これは各国

の代表の司教・司祭・シスター・信徒すべてがAからYまでの部会に別れ、更に十名ほどの小部会に分かれて、皆個人の立場で夫々「証」するという方法です。日本で行われる分かち合いと基本的には同じです。司会者が互選されて、それぞれまとめを書き、それをすべての会議の終わった後の夜の次の日の大会での報告書を作成するといった具合です。



日本の参加団がそろって

第一日は「自己紹介と夫々のイエスとの出会い」、第二日は「アジアの異なる宗教の間におけるイエスとの出会い」、第三日は「異なる文化、政治体制のなかでのイエスとの出会いとその発展」と、テーマが決まっております。その分かち合いの方法については第一日の基調講演でフィリピンの大司教が具体的に述べたものに則って行われるのですが、広いアジアのこと、それは司会の方は苦労されました。

私が属したのはR分科会。構成はインド、ラオス、カンボジア、シンガポール、タイ、インドネシア、ポーランド、日本の司教・司祭・シスター・信徒からで、なごやかな雰囲気のうち

の出来ないラオスやカンボジアのかたの為に一人のシスターが通訳を引き受けましたので、少々時間がかかりましたが、インドの司会の方の難解な英語に苦しんでいた私には救いのゆとりとなりました。それぞれの方が真剣に話されていました。特にラオス、カンボジアの方々の話しには心を打たれました。カンボジアのカトリック者は総数四〇〇人弱、ラオスは総数三五〇〇人。社会体制や異文化の中で、教会が必死に闘っている様子が手に取るようにわかります。この二カ国だけではありません。ヒンズーやイスラム教の中で少数派のカトリック教会は社会の中で闘わずに生存すら難しいのです。分かち合いは基本的に「聞く」のが第一ですが、国による差は大きく時に質問ができるのは当然です。例えば、ラオスの教会は市民にオープンとなっているのかという質問ができました。答えにくい質問ですが、時間外にベトナムの司教様にお聞きしたところでは、あの観光地化しているホーチミン市のカテドラルですら基本的に信徒にのみ開かれているとのことでした。今回は代表団の出席の無かった中国(大陸)はどうなのでしょう。

またポーランドからアジアの宣教への個人的関心から自発的に参加した司祭から、タイの仏教文化の素晴らしさを讃えながら、何故アジアの人々が固有の文化から脱出してカトリックへとなるのか、という質問ができました。

どなたも答えませんでした。が、
「貧しさからの脱却」(現体制に
密着した文化や宗教からドロッ
プアウトした人々)など現実的
な問題もあると、会議の後で、話
しあったことでした。このこと
は、メールでお互いに討議する
ことを約束して別れたのです。

それにしても浮かび上がって
くるのは、日本の教会の姿勢で
す。私は、下手な英語に苦労しな
がら、社会の貧困を克服したよ
うに見える国における「宗教へ
の無関心」(Religious Apathy)
の問題と、自分の娘を引きあい
に出しての青少年における「心
の問題」と自殺や犯罪の増加、
そして日本の教会の内向きな姿
勢を語りましたが、へーえとい
う嘆声の主たる反応で、司会の
方もまとめに取り上げることが
ありませんでした。

タイのようにアジアでは優等
生と呼ばれる国においても「貧
困」や「エイズ」の問題は残り
ます。タイでは教育費は無料と
のことですが、それにも拘らず
学校に行けない状況は主として
北部にはあるようです。しか
し、国の経済状況が良くなる
と、日本のような様々な社会問
題が噴出してくるのは悲しいこ
とです。この問題がいわゆる先
進国の普遍的な問題なのか日本
独自の問題なのかは、もう少し
共通の社会問題を抱える国々
の間での一つ一つの「大会」が
必要で、そこでこそ話しあわれ
る事なのでしょう。人によって
は、この問題を討議する第三バ

チカン公会議が必要だという方
もおられる位です。

しかし、日本の教会は司教団
にのみまかせるのではなく、教
会の外の問題にもっと心を痛め
るべきでしょう。特に、青少年
を取り囲む社会環境について
は、宗教家として取り組むのは
焦眉の急ではないでしょうか。

司牧と言って、わずかな信徒か
らなる小教区教会のお世話に明
け暮れるのは贅沢な話しである
と、アジアの人々の話しを聞き
ながら思いました。いえ、これ
は参加した日本人信徒の一致し
た感想であったのです。同行し
た野村司教様に、NICEI、
II以後の日本の教会の取り組み
について質問をいたしました
ら、波はありますが、着実にN
ICEIの精神は日本の教会に根
づいていると思うとお答えにな
りました。そうあって欲しいと
心から思ったことです。

会議後、スリランカの司祭か
ら自分の教会の修理についての
献金(ドネーション)を教区・
小教区レベルで依頼できないか
と頼まれました。あゝ、日本が
期待されていることは、カトリ
ックの「時代への対応」のよ
うな神学的なことではなくて、
単なる「援助」なのかと思うと、
少しですが落ち込みました。

最後に大会宣言が文書で発表
されて長い大会は終わりました。
しかし、これはミサの最後の挨拶
のように、終わりの宣言とい
うよりは、参加者がそれぞれの
国・社会・職場に「派遣」され

召命

召し出しの歩み

フベルト・ネルスカンプ 神父
(直江津教会)



去年私は五年ぶりにドイツに
帰りました。ふるさとの小教区
で司祭叙階40周年をお祝いしま
した。私一人ではなく、三人の小
学校の同級生と一緒に祝いが
できました。同級生のシスター
もいらっしやいました。この小
教区では召命が多いとは言えま
せん。私たちより五年前に一人
が叙階されました。その前何十
年は召命はありませんでした。
なぜだか分かりませんが、神様

たのだと思います。

イエスはアジアに生まれまし
た。旧約の世界から新約の世界
へ連なるように、それぞれがそ
れぞれの旧約の世界からそれぞ
れの国や社会で生まれる「イエ
スの物語」を語ろう(Telling
The Story Of Jesus)という
のが、この大会の精神でありま
した。現代におけるカトリック
教会のキーワードは「時のしる
し」です。

今を生きている人にしか出来
ないことがあるのだと心に銘記
して帰国したのでした。

の働きは不思議です。私たち三
人は違う修道会に入りまして、
叙階されてから違う国で宣教し
てきました。一人はドイツでそ
の修道会の学校で先生として働
きました。もう一人はフィリピ
ンに宣教師として行きました。

私が日本に来たのは四十年前です。
いつから召命を感じ、司祭に
なりたいたと考えたかはっきり覚
えていませんが、侍者をした時
ミサをささげる司祭を奉仕する
時こういう考えが始まったと思
います。その時ミサはまだ全部ラ
テン語で、色々な祈り(コンフィ
テオル、スシピアトなど)をラテ
ン語で覚えなければなりません
でした。司祭は祭壇に向かって
ミサをささげて、侍者はミサレ

(ミサの重い本)を祭壇の右側か
ら左側に運び、ミサの終わりに
また右側に運びます。バランス
を上手にとらないと重いミサレ
を落とすこともありました。侍
者をやるのは楽しくて、いつ自
分の当番になるか互いに競争し
ました。司祭に奉仕し、みなの前
で侍者することは召命を深め
る影響が大きかったと思います。
高等学校(ドイツのジムナジ
ウム九年間)の先生の一人はフ
ランシスコ会の神父様でした。
よく私たちと一緒にハイキング
や遊んだりして、ミサをささげ
ました。いつも私の召命を考え
て、よく私を修道院に招待し、
食事を出してくださいました。

四十一年前に一ヶ月船に乗って
日本に上陸しました。学校で日
本語の勉強の苦労を超えてから
関西と現在北陸で宣教活動を続
けることができたのは神様の恵
みとドイツのふるさとと日本の
たくさんの方々の支えだと思い
ます。感謝します。

妙高高原へのお参り 召命のための 青年の黙想会

場 所：妙高教会 赤倉山荘 電話0255-87-2780
(〒942-2102
新潟県妙高市田切字西原218番33他)

テーマ：太陽の歌(被造物の賛歌)

一姉妹なる雪とともに神を賛美して—

日 時：2007年2月10日(土)16時～12日(月)昼食まで

指 導：松井繁美師(フランシスコ会)他、フラン
シスコ会士・無原罪の聖母フランシスコ姉
妹会のシスターたち他

対 象：独身信徒

参加費：5,000円(当日受付) 一日だけの参加も可
持参品：聖書、筆記用具、洗面用具、防寒着、防寒
靴

申込み：Fax、E-mail、葉書のいずれかで、氏名・
住所・電話番号・年齢・所属教会名を記入
し、1月末までに下記へ

〒943-0834

新潟県上越市西城町2-3-12

フランシスコ会上越修道院

Tel: 025-543-2230

Fax: 025-543-4399

E-mail: hubertnelskamp@hotmail.com

花園教会創立55周年を祝う

十一月三日、花園教会(新潟市)が創立55周年を迎えて、県内の教会代表をはじめ山形県の鶴岡教会の信徒たちなど二二〇人近くが参加して感謝ミサをささげて、半世紀余の小教区の歩みを祝福した。

花園教会(当初の名称は沼垂教会)は一九五一年(昭和二十

六)十一月三日に神言会のハイ

ンリッヒ・ホンナツケル神父に

よって、栗ノ木川畔に新潟市東

地区の宣教活動の拠点として沼

垂(ぬつたり)の地に教会は献

堂されたが、三年後の昭和二十

九年に新潟県の都市計画のため

に現在地に移転しなければなら

なくなつて、昭和三十四年に新

て上げ、小教区を作り上げてき

感謝ミサを司式された菊地司

教は説教の中で、昭和二十六年

に沼垂の地に教会を献堂されて

ここまで大きく育てられた神言

会の宣教師の方々、そしてそれ

を継いだ教区司祭の一人お一

人の努力と献身に感謝します。

福音の種を蒔き、共同体を育

つて上げ、小教区を作り上げてき



感謝して証し人となる決意

た司祭・信徒の方々の熱意を私
たちも引き継いで、福音宣教に
励みたいと述べた。

これからも次は百周年を目指
して、日々の行いを通じて福音
の証し人となる決意を共に新た
にしていただきたいと呼びかけ
た。

教区青年の集い(報告)

赤倉山荘

合った。

二日目は朝の祈り、ロザリオ
の祈り、当日の福音の分かち合
いがあり、菊地司教がミサをさ
さげた。

妙高教会の背後にそびえる妙
高山頂は雪をかぶっていた。
小教区での20代から30代の青
年に、教区の青年のネットワー
クに参加するように励ましてい
ただきたい。

参加者の感想は次のとおり。
○妙高は大変よかったです。仲
間と出会えて本当のつながり
が、見えてきたような気がし
ています。(F)

○新たな福音的息吹きを吹き込
まれ始めている赤倉山荘で、
動き始めた新潟教区の青年
達。飼いの葉桶の中の希望と
は、こういう小さいところか
ら始まっていったのだなと感
じました。(I)

○20代から30代の若い人たちが
出会い、とても良い人たちが
居ると、心も体もすっきり癒
されました。神様のお恵みに
感謝いたします。(K)



司教の日記(抄)

<http://homepage2.nifty.com/isaoymk/BishopTop.htm>

感謝のミサと祝賀会が行われま
した。

感謝ミサは私の司式で、現園
長のピアス師をはじめ、学校法
人双葉学園の理事長を務める鶴
岡の本間師、歴代の園長や、小
教区と幼稚園を担当しているイ
エズス・マリアの聖心会管区長
成田師など、七人の司祭が参加
して捧げられました。

幼稚園は当初はシャルトル聖
パウロ会、その後カロンデレッ
トの聖ヨゼフ会のシスター方が
保育にあたりましたが、現在は
仙台に日本管区本部のあるオタ
ワ愛徳修道女会のシスターが副
園長を務められています。ミサ
終了後にはすぐ近くの山形グラ
ンドホテルを会場に祝賀会を行
いました。祝賀会では幼稚園で
音楽を担当している先生による
声楽の披露や、マジックショーまで
あり、楽しい時間を過ごしました。

今日の日曜日は、山形教会の
○毎日の忙しさから、「時間の流
れ」に流されるままだった私
にとつて、この「青年の集い」
で出会った人たちとの話は
「信仰」や「生きること」などを
改めて考える良い機会となり
ました。またいつか、もっと多
くの方々と様々なことを分か
ち合えたらと思います。(O)

教区青少年司牧担当

石黒晃泰神父
高橋 学神父



方々と主日のミサを捧げまし
た。ピアス主任司祭と成田管区
長は新庄へミサに出かけました
ので、助任のワルヨ師と一緒の
ミサでした。

山形教会の聖堂はかなり歴史
のある建物でこじんまりとして
いるものの、木造で落ち着いた
ある祈りの場です。

山形教会では現在、信徒会館
を新築中です。教会前の道路は
都市計画で将来拡張の予定があ
り、それにあわせる形で少し後
ろに下げて建設となりました。

新しい信徒会館は一階建てで床
面積こそ旧会館より少なくなっ
たように見えるものの、これま
であつた信徒会館の機能をすべ
て取り入れて、ゆつたりとした
スペースの建物になっています。

信徒会館は十二月十五日頃
に完成の予定で、十二月十七日
に私がもう一度山形を訪れて建
物の祝別式を予定しています。

その日は雪が降らないことを
祈ります。